

## はじめに

「将来の進路を選ぶときは、後悔しない選択肢を選びたい」と言われることがある。だがこのように言うことは「将来の進路を選ぶときは、最善の選択肢を選びたい」と言うのと同じであろうか？もし後悔というものが、人生の選択肢の中で最善の選択肢を選ばなかったときに生じるものであると単純に考えてよいのであれば、後悔をしない選択肢を選ぶことは、最善ではない選択肢ではない選択肢を選ぶということであるから、それは最善の選択肢を選ぶことと同じになるだろう。そうなのだとすると、「後悔しない選択肢」という表現は「最善の選択肢」と同義だという結論になる。だが、これは本当だろうか？「後悔しない選択肢」という言い方は、「最善の選択肢」を回りくどく言っただけのものに過ぎないのだろうか。そこで本論では、後悔しない選択肢と最善の選択肢が乖離する可能性について探索してみたい。

## 嫉妬と後悔

後悔について直接的な検討を始める前に、その準備として嫉妬についての議論を紹介したい。嫉妬 [envy] の簡潔な定式化は、例えばノージック (1989) に見出すことができる。ノージックは自分と他者の状態についてのごく単純化された可能性を想定する。ここでは自分と他者はそれぞれ、あるものに関して、それを持っている状態と持っていない状態の二つだけが区別され、計四通りの可能性が存在している。

- 1 他者も自分もそれを持つ
- 2 他者はそれをもち、自分はそれを持たない
- 3 他者はそれを持たず、自分はそれを持つ
- 4 他者も自分もそれを持たない

嫉妬深い [envious] 人というのは、ノージックによれば4より3を選好し、かつ、2よりも4を選好する人のことである。

また経済学では、自分が10000円もらい比較対象となる他者が20000円もらうよりも、自分も他者も8000円もらう方がよいと考えるような傾向のことを嫉妬と呼んでいる。例えばフェアとシュミット (1999) は、人には不平等を嫌う傾向があり、そのような者は、自分と比較対象となる他者の二人がいる状況で、自分の獲得金額を  $x_i$ 、他者の獲得金額を  $x_j$  としたとき、効用  $U$  が、

$$U = x_i - \alpha \max(x_j - x_i, 0) - \beta \max(x_i - x_j, 0)$$

という関数によって規定されると考える。ここで $\alpha$ は嫉妬の強さを表す定数、 $\beta$ は他者の獲得金額が自分より少ないことを嫌う程度——この感情は「共感 (sympathy)」とでも呼ぶべきだろうか?——を表す定数である ( $\beta$ が正であるような者は、自分が他者よりもより多く獲得することをよしとせず、逆に $\beta$ が負になる者は、他者の獲得金額が少なければ少ないほどよしと考える)。 $\alpha$ の値が正の大きな値であればあるほど、その人は嫉妬が強いということになる。もし人間が他人の獲得するものなど気にも留めず、自分の状態だけで自分の効用が決まるような利己的な存在であるなら、単純に $U$ は $x_i$ の単調増加関数であると考えればよかつただろう。フェアとシュミットが効用を決定するのに他者の状態を参照する必要があると考えるのは、そのように考えるとこれまで経済学的には説明できなかった人間の行動が、うまく説明できるようになるからである。例えば、経済的に合理的な人間も、常に自分の収入を最大化しようとするわけではなく、しばしば、自分の収入を犠牲にしても公平 [fair] な結果を追求するということが、これによってみごとに説明できたのである。

例えば $\alpha = 0.5$ だとすると、 $x_i = 10000$ 、 $x_j = 20000$ のときは、 $U = 5000$ であり、 $x_i = 8000$ 、 $x_j = 8000$ のときは、 $U = 8000$ となるので、このような者は前者よりも後者を選好することになる。もし自分の獲得金額が最高になる選択肢を「最善の選択肢」と呼んでよいならば、人間には嫉妬の感情があるために、最善の選択肢と嫉妬しない選択肢が乖離する可能性が生じるのである。

私がここで嫉妬の話を持ち出したのは、同じことが後悔の場合にも当てはまるのではないかと考えたからである。というのも、後悔というのは、いわば実現されなかつた他の可能性に対する嫉妬だからである。

そこで次に、最善の選択肢と嫉妬しない選択肢が異なるものでありえたように、最善の選択肢と後悔しない選択肢が異なるものでありうるかどうかについて考えたい。二つの選択肢があり、選択肢 $i$ を選択したときの獲得金額を $x_i$ 、選択肢 $j$ を選択したときの獲得金額を $x_j$ とし、選択肢 $i$ を選択したときの効用 $U_i$ を、嫉妬の場合に倣って

$$U_i = x_i - \alpha \max(x_j - x_i, 0) - \beta \max(x_i - x_j, 0)$$

と規定すれば、最善の選択肢と後悔しない選択肢の違いを上手く説明できないだろうか。ところが、これはうまくいかない。というのも、この場合どんな人でも $\alpha$ と $\beta$ は非負になると思われるのだが、そうだとすると $x_i > x_j$ の場合は、必ず $U_i > U_j$ となるからである。

最善の選択肢と嫉妬しない選択肢が異なるものでありえたのは、選択肢によって、参照される他者の状態が異なっていたからである。先の例で言えば、前者の選択肢では他者が20000円獲得するのに対し、後者の選択肢では他者が8000円しか獲得しないというように違いがあることが、両者が乖離するためには必要不可欠だったのだ (厳密には、 $\beta > 1$ のときは、他者の獲得金額が同じでも最善の選択肢と「憐憫の情に駆られない」選択肢が乖離する可能性があることになるが、 $\beta > 1$ であるような人は実在しそうにないし、

ここでの議論には関係ないだろう)。

そうすると、もしそれと比較して後悔の念が生じる他の可能性が、選択された選択肢ごとに異なるのであれば、最善の選択肢と後悔しない選択肢は乖離しうることになるだろう。例えば選択肢1では、獲得金額は10000円だが20000円獲得できたかもしれないと思うのに対し、選択肢2では、獲得金額は8000円だが他の選択をしても獲得できるのは同じ金額だったと思うのであれば、最善の選択肢は選択肢1であり、後悔しない選択肢は選択肢2であるというように、両者に違いが出てくる可能性がある。

世界中のあらゆる人がある人の嫉妬の対象になるわけではないのと同じように、私たちは、論理的にありうるあらゆる可能性と現実の状況を比較して後悔したりしなかったりしているわけではない。人は、特定の人や特定の集団に属する人々を念頭に置いて、それと自分の状況を比較することで嫉妬するように、特定の可能性を念頭に置いて、それと現実の状況を比較することで後悔するのである。それゆえ、どのような他の可能性が念頭に置かれるかが選択肢ごとに異なる、ということは十分ありそうな話なのである。次節ではその具体例を考えてみたいのだが、この節の残りの部分では後悔と嫉妬の類似点と相違点を検討し、両者の間にある種のパラレリズムが成り立つのがどうしてなのかを考察してみたい。

嫉妬も後悔も感情の一種であるが、どちらも認知に深くかかわりを持った感情である。嫉妬と後悔が認知に深く関わるのは、この感情が生じるかどうか、自分の状態を見ただけでは決まらないということに由来している。嫉妬は、自分の状態と他者の状態を比較することではじめて生じ、後悔は、現実の状態と他の可能性を比較することではじめて生ずる。さらにどちらも、現実の自分の状態が参照される他者や他の可能性と比較してより悪い状態である時に生じる感情なのである。嫉妬と後悔は、時に重なって生じることがあるだろう。例えばあなたに親友がおり、あなたと親友は共に将来ミュージシャンになることを夢見ていたとしよう。だがあなたは、夢半ばであきらめて普通の会社員になった。一方親友は、高校時代からの夢をかなえてミュージシャンの道を歩みつつあったとしよう。親友の活躍を見たあなたは、親友に嫉妬の気持ちを抱くと同時に、自分も夢を諦めなければよかったのに、と後悔するに違いない。

だが、嫉妬と後悔の間には重要な相違点もある。嫉妬は通常、美貌や天性の才能や生まれた家庭の裕福さなど、自分がどれだけ努力しても到達できない恵まれた他者に対して持たれる感情であるのに対し、後悔の方は、自分の能力の及ぶ範囲内で生じるのが普通である。後悔は、選択することもできたよりよい選択肢を選択しなかったために生じることが多いのである。

嫉妬と後悔の類似性は、もしかしたら他者理解についてのシミュレーション説 [simulation theory] というものとの関係があるかもしれない。シミュレーション説とは、一般に人は、他者をシミュレートすることによって、噛み砕いて言うならば、他者の立場に立ち他者を演じてみることで他者を理解しているとする理論のことである。これがなぜ

後悔と嫉妬を結びつけるかという点、シミュレーションによって他者を理解するという考え方が、可能性というものと、他者というものを結びつける媒介項になりうるからである。つまりシミュレーション説が正しいとすると、私たちはシミュレーションによって他者を理解し、シミュレーションによって他の可能性を理解しているということになりそうなのである。後悔が他の可能性に対する嫉妬であると考えてよいのだとすれば、嫉妬と後悔という二つの感情は、どちらも人がシミュレーションする能力から派生してきたと考えることさえできるのである。例えばハーレー（2006）は、共有回路モデル〔shared circuit model〕と呼ばれるシミュレーション説を全面的に取り入れたモデルを提案し、あらゆるものが混淆していた原始的な認識状態から、次第に行動と知覚が分化し、自己と他者が分化し、現実と可能性が分化していくプロセスを提起している。つまり他者を理解する能力も、他の可能性を理解する能力も起源は同じだと、彼女は論じているのである。

独我論について深く考察している永井均（2001）は、他者と他の可能世界の類似性に着目している。可能世界の存在論については、ソール・クリプキを代表とする、可能世界は言語的な構成物に過ぎず、存在するのは現実世界だけだと考える現実主義と、デヴィッド・ルイスを代表とする、可能世界は現実世界と同じように存在すると考える可能主義の二つの立場が存在している。永井が指摘するのは、世界には自分だけしか存在しないと考える独我論は、可能世界についての現実主義の立場に類比的だという点であった。つまり独我論とは、存在するのは私だけであり、他者は言語的構成物に過ぎないという立場だと特徴付けることができるのである。一方、可能世界についての可能主義の立場を採るルイスは、「現実」という言葉を、「私」や「今」と同じ指標詞〔indexical〕であると主張した。「私」が話し手を指し、「今」が話されている時点を指しているように、「現実」は話し手が存在する世界を指していると考えたのである。ルイスによれば、他の可能世界も、私たちが「現実」と呼ぶ可能世界と全く同じように存在しており、他の可能世界の住人にとってはその可能世界が「現実」なのだという。同じことを「私」に当てはめるなら、他者も、自分が「私」と呼ぶ人間（つまり自分）と同じように存在しており、他者にとっては、その他者自身が「私」なのだ、ということになる。これは非独我論的な立場である。永井はこのようにして、独我論を可能世界についての現実主義に、非独我論を可能世界についての可能主義に対応付けるのである。

永井は、現実世界において私は主人公であり、他者は、生じる出来事は現実世界と全く同じであるような別の可能世界の主人公であるという。現実世界にも、他の可能世界の主人公であるような他者が登場するのだが、主演である私を引き立てる助演としてでしかない。このように考えるなら、他の可能世界が現実世界が存在するのと同じような意味で存在するかどうか、という問題が、他者が私が存在するのと同じような意味で存在するかどうか、という問題と呼応しあっていることが見て取れるのではないだろうか。

### 「すればよかった」と「しなければよかった」

この節では、最善の選択肢と後悔しない選択肢が、実際に乖離する例を考えたい。ギロヴィッチとメドヴェック（1995）の、後悔についての文献をレビューした論文では、何かをしてしまったことによる後悔〔regret from action/commission〕と、何かをしなかったことによる後悔〔regret from inaction/omission〕を比較し、短期的には何かをしてしまったことによる後悔の方が強いものの、長期的には何かをしなかったことによる後悔の方が強いということが指摘されている。ギロヴィッチとメドヴェックは、このようになる原因をいくつか考察している。例えば何かをしてしまったことによる損失は有限で、時間をかければ埋め合わせることができるのに対して、何かをしなかったことによる損失というのは推し量ることができず、時間をかけても埋め合わせることができない、とか、実際に行なったことより、しようとしたのに実行しなかったことの方がより長く覚えている、といったものである。これらの説明も納得の行くものなのだが、私は、これらの説明を踏まえつつも異なる理由を提案したい。

そもそも、長期的に見ると何かをしたことによる後悔よりも何かをしなかったことによる後悔の方が強いという結果が得られたのは、「これまでの人生で最も大きな後悔を挙げてください」と問うアンケートの結果からである。このことを鑑みると、「すればよかった」と「しなければよかった」の非対称性が見えてくるように思われる。その非対称性とは、自分の人生を「～をしなかった人生」と記述する人は、それと比較して後悔の念が生じるころの他の可能性が「～をした人生」でありそれを明確に意識している人であるのに対し、自分の人生を「～をした人生」と記述する人は、それと比較して後悔の念が生じるころの他の可能性が「～をしなかった人生」でありそれについての明確なヴィジョンがない人だ、というものである。つまり「～をした人生」という他の可能性の方が、「～をしなかった人生」という他の可能性よりも、鮮明に意識されるのである。このことと、他の可能性との比較によって後悔が生じるということを組み合わせるならば、何かをしなかったことによる後悔の方が、強い後悔であるということにも納得がいくであろう。

そうであるとする、例えばミュージシャンになるというような大きな夢を持っている人がいたとして、その人がその夢を追いかけて生きるか、夢を諦めて普通の仕事をするかという二択には、重要な非対称性を指摘できることになるだろう。前者を選んだことによって生じる後悔は「しなければよかった」であるのに対し、後者を選んだことによって生じる後悔は「すればよかった」なのである。そしてその人が、「すればよかった」という後悔が「しなければよかった」という後悔よりもはるかに強いものであることを、決断の時に意識したとすれば、彼はどれほど成功確率が低かろうとも、夢を追い続けるという選択肢を選ぶかもしれない。夢を諦めた方が期待値としてはよりよい人生が送れる見込みが高いにもかかわらず、より後悔が少ないことが期待される、夢に忠実な選択肢を選ぶ可能性があるのだ。傍目からはどう見ても実現しそうな夢を追い続ける人は、もちろん夢の実現確率を過大評価しているために夢を追い続けているのかもしれないが、それだけ

ではないかもしれない。彼らは「最善の選択肢」ではなく、あえて「後悔しない選択肢」を選んだのかもしれないのである。

#### 参考文献

Fehr, Ernst & Klaus M. Schmidt. A Theory of Fairness, Competition, and Cooperation.

*The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 114, No. 3. (Aug., 1999), pp. 817-868.

Gilovich, Thomas & Medvec Victoria Husted. Experience of Regret: What, When, and

Why. *Psychological Review*, Vol. 102 (2), (Apr., 1995), pp. 379-395.

Hurley, Susan. “Active Perception and Perceiving Action: The Shared Circuits Model,”

in *Perceptual Experience*. Eds. by Tamar Szabó Gendler & John Hawthorne,

Oxford: Clarendon Press, 2006, pp. 205-259.

永井均 『転校生とブラックジャック』 岩波書店、2001年。

ロバート・ノージック 『アナーキー・国家・ユートピア』 嶋津格訳、木鐸社、1989年。